## もくじ

１．はじめに

２．教職員のご紹介！

３．履修についてざっくりと

４．サブメジャーとは？

５．留学について

６．フランス科を選んだ理由
／時間割をのぞいてみよう

７．卒論について

８．進路について

９．おわりに

# １．はじめに

この冊子をお手に取ってくださったことに、すこしでも教養学科・地域文化研究分科フランス研究コースへご関心を向けてくださったことに、まずは心からお礼を申し上げます。地域文化研究分科は対象とする「地域」に応じた 9 つのコースから構成されますが、そのなかでフランス、ベルギー、スイスのみならず、アフリカ、カリブ海地域、ケベックなど世界各地へ及ぶフランス語圏をフィールドとするのが、わたしたちの「フランス研究コース」です。けれども、そう言っただけでは漠然としているかもしれません。このパンフレットは、フランス研究コースが実際には「どんなところ」なのか、一端なりともお伝えしようと、現役の学部生が寄せた声を中心に編まれたものです。

「フランス科」それがこのコースの愛称です。わたしたちはこの呼び名をずっと使い続けていますが、制度上は 2012 年度の冬学期に「地域文化研究学科フランス分科」から「フランス研究コース」へ正式名称を改め、カリキュラムや履修の仕組みがすこし変わりました。とはいえ、先生方の構成をはじめ基本的な枠組みや学修上の原則は、根本的な変更なしにしっかりそのまま続いています。そして何より、愛称と同じくらい長く受け継がれてきた「精神」が、この研究室に今なお息づいています。

ごくささやかな冊子ではありますが、研究室の雰囲気をお届けできればと願います。今はまだ進学先をお悩みになっているであろうみなさまに「フランス科だったら何をどのように学べるかな」という、想像へ誘うことができたならば幸いです。

# ２．教職員のご紹介！

フランス研究コースでは、専任教員をはじめ、多くのフランス語系の先生方が授業を担当されています。必修科目はさほど多くないため、それぞれの先生のご専門を反映した、多彩で魅力的な授業のなかから、学生の関心に応じて自由に時間割を組むことができます。また、学生にたいする先生の人数が比較的多く、多様な興味・関心をもつ個々の学生を尊重した、手厚い研究指導を受けることができるのもフランス科の特徴です。

ここでは、フランス研究コースの専任の先生方に研究内容の一端を披露していただくほか、外国人教員や非常勤教員、教務補佐員、他コース・他分科のフランス語にかかわる先生方の紹介をいたします。（敬称略）

## ◆フランス研究コース専任教員

### ○原和之【コース主任】

20 世紀フランス思想に精神分析がもたらした影響を中心に、ヨーロッパにおける「分析/解析（アナリシス）」概念の歴史、フランスにおける同性婚の問題などについても研究を進めている。

### ○伊達聖伸

宗教学。おもな研究対象は、近現代フランスとケベックの世俗と宗教の関係。ライシテ（脱宗教性、政教分離、世俗主義）をめぐって、共和国とは何か、フランスの普遍性と特異性とは何かを考えている。

### ○中尾沙季子

アフリカにおけるアイデンティティ形成のプロセスとナショナリズムとの関わりについて。大西洋を越えたアフリカン・ディアスポラとアフリカ大陸との交流や、「アフリカ」観の相違にも関心を持っている。

### ○藤岡俊博

エマニュエル・レヴィナスを中心としたフランス現代哲学・思想。「MAUSS（社会科学における反功利主義運動）」の活動を手がかりに、「贈与」や「利益」といった概念をめぐる思想史的な研究もおこなっている。

### ○森山工

マダガスカルの文化・社会に関する人類学的研究、つまりマダガスカルの特定地域における現地調査に基づいて人々の生活実践のあり方を具体的に考察、更にそれを近現代の歴史的な文脈に位置づけて把握する。

## ◆外国人教員

○**クリス・ベルアド**（日仏交流史）

○**アルベリック・ドリブル**（言語学）

## ◆非常勤教員

・エルヴェ・クショ（フランス思想、フランス哲学）

・宮下雄一郎（国際関係論、フランス外交史）

・斎藤かぐみ（翻訳、フランス現代社会）

・芹生尚子（フランス近代史）

## ◆教務補佐員

・大前元伸（フランス思想・哲学）

◆上記のほかにも、（フランス研究コース以外にご所属の）地域文化研究分科の先生、超域文化科学分科に所属されるフランス語専任の先生方が、関連する授業を担当されています。

・今橋映子（比較文学、比較文化）

・桑田光平（フランス文学、芸術論）

・郷原佳以（フランス文学）

・實谷総一郎（フランス文学）

・谷本道昭（フランス文学）

・寺田寅彦（フランス文学、比較文化）

・松井裕美（美術史）

・森元庸介（ヨーロッパ思想史、表象文化論）

・渡邊淳也（言語学）



# ３．履修についてざっくりと

こまかな履修のルールについては、進学後のガイダンスを踏まえ、『便覧』や『授業内容』を精読していただくことがどうしても必要になりますが、ここでは 2024 年度時点での、必要な単位数と科目の位置づけをおおまかにご案内します。

まず、フランス研究コースを卒業するには、

**合計 76 単位以上**

を取得することが必要です。他の地域文化研究分科のコースと共通で、その内訳は次のようになっています。

## ①高度教養科目：6 単位以上

リレー形式を交えながら、教養学科所属の学生全体に向けて汎く開講される科目です。なお、サブメジャー・プログラム（後述）によって置き換えることができます。

## ②言語科目：22 単位（＋4 単位）

地域文化研究分科の大きな柱、外国語科目です。質量ともに充実した精読・作文・会話・文法の授業によって外国語運用のための基礎を培いつつ、専門的なレベルへ踏み込んだ内容を扱います。フランス研究コースでは、フランス語 18 単位以上、かつ他の同一言語 4 単位以上の取得が求められています。また、22 単位を超えて取得した場合、4 単位までを卒業に必要な 76 単位に含めることができます。

## ③フランス研究コース科目：22 単位以上

フランス研究コースの基幹部分を構成する科目です。フランス語テクストの丁寧な読解を軸としながら、歴史、思想、文学、社会を中心に、知見を積み重ねてゆきます。

## ④卒業論文：10 単位

フランス科研究コースの卒業論文は、フランス語での執筆が義務づけられています。

さて、①から④までを総計してもまだ 60 単位ですから、卒業にはさらに 16 単位を上積みしなければなりません（「～以上」とあるのはそのためです）。この 16 単位には教職科目、特設科目、他学科・他学部の科目からも自由に組み込むことができます。

それにしても、卒論はフランス語だというし、けっこう負担が重そうだな……と思われるかもしれません。けれど、多分野をカバーする教員陣とネイティヴの特任教員による手厚い指導がありますので安心してください。まずは履修案内を隅々まで眺め、気になったところから飛び込んでみましょう。単位の配分も大切ですが、それを気にするのは後まわしでかまいません。予習、授業、予習……というサイクルをくりかえすうち、自然に息継ぎ、そして息抜きのコツもつかめてくることでしょう。

※年度毎に、上記の単位数の内訳や科目の位置づけ等が変更される可能性があります。進学後は、2024 年度の『教養学部便覧（後期課程）』で確認してください。

※後期課程の授業シラバスについては「東京大学授業カタログ」（http://catalog.he.u-tokyo.ac.jp/）の後期課程版や UTAS をご参照ください。

# ４．サブメジャーとは？

教養学科に独自の制度であるサブメジャー・プログラムについて簡単にご説明をします。

サブメジャー・プログラムは、学習の幅を広げるために設けられた仕組みです。おおまかには、高度教養科目（6 単位以上必須）の代わりに、教養学科の各コースからひとつを選び、14 単位（その内訳はコースごとに異なります）を取得するプログラムと考えてください。たとえば表象文化論や相関社会科学といった異なる分科のコースを選ぶことも、あるいはまたイギリスやドイツといった地域文化研究分科内の他コースを選ぶこともできます。さらに、コースを横断して独自のプログラムをカスタマイズすることだってできます（カスタマイズ型サブメジャー・プログラム）。カスタマイズ型では、あるテーマを設定し、そのテーマの下に取得する単位の内訳を学生自身が決めます。ただし、カスタマイズ型を利用できるのは地域文化研究分科のどれかのコースに所属する学生に限ります。

サブメジャー・プログラムを利用する理由は様々ですが、教養学科を味わい尽くそう、という方にはうってつけのオプションであることはまちがいありません。では、実際にサブメジャー・プログラムを利用している方の話を聞いてみましょう。

### カスタマイズ型サブメジャー・プログラム選択（K. A さん）

地域文化研究分科の学生は他の分科にはない「カスタマイズ型サブメジャー・プログラム」を申請することができます。これは、複数のコースから自由に単位を(14 単位以上)選択し、それを一つのテーマの下で組み合わせることで、自分の好きなサブメジャー・プログラムを構成することができるというものです。カスタマイズ型は受講の自由度と自分の決めたタイトルでサブメジャーを取ることができることが他にはない魅力です。私の場合は、もともとカントやデリダを通して認識論や言語表象と実在、言語行為と倫理といった問いに関心を抱いていましたが、学びを深めるうちに大陸哲学と分析哲学の垣根を越えることや現代の言語科学の知見を反映することが必要だと感じ、言語についての哲学的な問いを中核に、現代思想コース・科学技術論コース・学際言語科学コースにまたがった一体的な履修を計画し、サブメジャーとして提出しました。サブメジャーを申請せずとも他コースの単位は取得できますし、申請によって免除される単位数もさほど多くはないので、制度の恩恵はその肩書くらいのものですが、履修の計画を通して自分の関心と向き合い体系立てることができたのは良かったと思っています。カスタマイズ型は三年の４月にしか申請できないので気をつけてください。

# ５．留学について

フランス科を進学先として考えている人の中には、フランスへの留学も視野に入れている人がいるのではないかと思います。実際にフランス科ではフランスへ留学する人が多数います。新型コロナ禍のため昨年度から留学が難しくなっていますが、ここでは留学する場合にほとんどの人が利用している、東京大学の交換留学制度について簡単に紹介しようと思います。

交換留学とは、東京大学が学生交流協定を締結している海外の大学（協定校）に１学期～１年間留学するプログラムのことです。留学先の大学で取った授業の単位は、東京大学での単位として互換することが可能で、留学期間中の学費は東京大学に納めれば良い、というのが主なメリットとなります。

以前は後期教養学部に独自の AIKOM という交換留学制度がありましたが、現在は全学交換留学（USTEP）などに移行しています。3 年生の秋学期から 4 年生の春学期にかけての留学を考えていらっしゃる場合の申込は、11 月頃までとなっていますので、早めに情報を確認しておきましょう。

フランス科の学部生の主な留学先には、

パリ政治学院／ストラスブール大学／
グルノーブル・アルプ大学／ジュネーヴ大学

などがあります。また、フランス語圏ではない国でフランスのことを学ぶという方法もあります。



**T. K さん　（ストラスブール大学・2024/25 年度留学）**

私は 2024 年 9 月から 1 年間、フランスのストラスブール大学に留学しています。

留学先としてストラスブールを選んだ最大の理由は、この街がドイツとの国境地帯に位置していることです。ストラスブールを含むアルザス地方は、神聖ローマ帝国の領域だった時期が長く、近代においても、フランスとドイツの間を行き来してきた歴史があります。現在でも、ライン川対岸の街ケールをはじめ、ドイツとの往来が盛んです。私は文化交流に関心があるので、フランスとドイツの交流・対立の舞台となってきたストラスブールで学ぶことができればと思い、この大学を選びました。

現地で生活してみて、やはり物価の高さを感じます。1€が、日本でいう 100 円くらいの感覚で使われている気がします。ただ、自炊を心がけて、食料品を買う店をきちんと選べば (ハイパーマーケットが良いです)、比較的節約して生活することも可能です。また、フランスは学生への支援が充実していて、学生寮は月 200€前後 (家賃補助含む)、学食は一食 3.3€ (来年から 1€になるらしい?) で利用できるので、かなり生活費が圧縮できます。

学業の合間に、週 2 回、日本食レストランでアルバイトをしています。給料を生活費に充てられるのも嬉しいことですが、一緒に働いている日本人・フランス人たちと仲良くなれること、日仏文化交流の現場を内側から観察できることも魅力です。

また、交換留学の場合、東大を通して様々な奨学金に申し込むことができます。私は月 8 万円ほどの奨学金を受給しています。行き帰りの飛行機代を考えても、日本で暮らすより経済的負担が少なかったり……

みなさんも、留学を通してフランス語や専門分野の知見を深めるのはもちろん、さまざまな経験を積んでみませんか。

# ６．フランス科を選んだ理由

では、ここで本科の学生がフランス科を選んだ理由をご紹介します。お読みいただけるとわかると思いますが、みなが最初から絶対にフランス科に進学すると決めていたわけではなく、いろいろな情報を知るうちにフランス科の自由度の高さ、研究範囲の広さに惹かれ、フランス科を選んだようです。また、時間割も参考に教えてもらいました。あなたもまだ進学先を迷っている段階かもしれませんが、体験談を読んで進学先を決める参考にしていただき、フランス科を選んでいただければ嬉しいです！

## M. A さん

進学選択の際、複数の学部・学科のガイダンスに参加したものの、最終的には「フランス語」という一つの共通の言語を軸にして様々な分野の学びが可能であるという点に惹かれてフランス研究コースに進学することを決めました。関心のある分野は存在するけれど一つに絞れない、そしてどの分野でも学んで理解すれば面白いと思ってしまう部分がある自分にとって、フランス語という一つの基盤を固めながら興味に従って様々な分野の勉強ができるフランス研究コースは最適ではないかと感じました。

実際に、現在はかねてから興味を持っていた国際関係論コースをサブメジャーとして履修しており、フンラス語圏やフランス語関連以外の内容の勉強にも身を入れることができています。

また、フランス研究コースの学生間、学生・教員間の距離の近さや、それゆえに感じられるアットホームな雰囲気も個人的に気に入っています。自分とは異なる興味関心を持った同期や先輩方との気軽な会話を通じて日々刺激をもらうことができる点も、このコースならではの魅力なのではないかと思います。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| １限 | | 共通フランス語 | | | |
| ２限 | ヨーロッパ政治論 | | フランス歴史文化論 | | |
| ３限 | 特殊講義「アフリカ国際関係」 | | 国際法 | フランス研究 III | 共通イタリア語 |
| ４限 | 国際法 | | | | GLC-I |
| ５限 | 国際法 | グローバル教養科目 | | | |

（2025 年度 3 年次 S セメスター時間割）

## K. A さん

私はおそらく、この資料に掲載されている人たちの中で一番フランス科から縁遠い人物だったと思います。私が第二外国語で履修したのは仏語ではなく独語で、フランスの社会や文化に特段の興味があったわけではなく、進振りの競争率が低い文Ⅱということもあって、フランス科に似つかわしくなく基本平均点は 60 点を切るほど低いものでした。

そんな私がフランス科を志望する導きの糸になったのは、フランスの哲学者ジャック・デリダです。私は彼の著作をきっかけとして哲学、とりわけ 20 世紀後半のフランスの哲学に興味を持ち、研究を志すようになりました。その目的のために、フランス科は好適でした。フランス哲学を専門とする教員が駒場に多くいること、研究に必要なフランス語を学ばざるを得ない環境に身を置けること、科学技術論や現代思想といった隣接コースに足を運びやすいこと……いくつかの点で哲学科よりもフランス科の方が私にとって優れた環境でした。私は今、哲学を中心に講義を履修しています。言語哲学を中心に領域横断的に他コースの授業を取り、水曜は本郷で文学部の授業を受けています。私のような状況から、私のような理由でフランス科を志望する人は少ないと思いますが、そんな奇特な人の参考になれば幸いです。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 限 | | 地域文化研究[フランス研究コース] | | | |
| 2 限 | ヨーロッパ政治論[フランス研究コース] | 専門フランス語(4) | 西洋哲学史概説第 2 部Ⅰ | フランス思想テクスト分析演習 | 専門フランス(1) |
| 3 限 | フランス現代社会論演習 | 科学哲学演習Ⅲ | | 科学哲学特論Ⅱ | 言語科学特殊講義(4) |
| 4 限 | | 現代哲学特殊演習Ⅱ | フランス語学フランス文学特殊講義Ⅲ | | 基礎言語理論Ⅱ：意味の体系 |
| 5 限 | | | | | 共通ギリシア語(11) |
| 6 限 | | | | | |

（2025 年度 3 年次 S セメスター時間割）

## D.I さん

第二外国語選択はスペイン語でした。ありがちな理由ではと思いますが、フランス系の現代の思想に関心を持ち、2S から第三外国語の授業でフランス語を勉強しはじめました。教養学部に私が興味を持つ学問分野が多かったため、進学選択では教養学部に行くことが優先事項でした。

フランス科の専任の先生方の専門分野はいずれも私の関心を惹かれるものだったので、ガイダンスに参加しました。その雰囲気がとても良く、さらに２年生からフランス語をはじめた先輩がいるとうかがい、（底点との兼ね合いもあり、）進学を決めました。フランス語は２年生の夏休みまでに何となく基礎文法を学び終えた程度であったため、2A ではフランス語系の科目は１つだけ履修しました。

フランス科の良い点としては、まずフランス語に触れる量が多いため、否が応でも一定程度その力がつくことです。これは私の消極的な進学理由の１つでした。また、コース科目の学問ジャンルはさまざまなので、幅広い関心の学生が学べますし、馴染みの薄かった分野に触れる機会にもなります。他学部・他学科の授業も取りやすく、本郷の授業を受ける人もいます。さらに学科部屋があり、同学年同士で、あるいは先輩たちとの交流を持ちやすいです。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| １限 | | | | | |
| ２限 | | 共通フランス語（１０）（会話） | フランス歴史文化論 | フランス思想テクスト分析演習 | 専門フランス語（１） |
| ３限 | | 科学哲学演習Ⅲ | 共通フランス語（１１）（作文） | 科学哲学特論Ⅱ | 言語科学特殊講義（４） |
| ４限 | | 広域フランス語圏文化論演習 | | | |
| ５限 | | 専門英語（２９） | 共通ドイツ語（１０）（初級） | | 印度語学印度文学特殊講義Ⅲ |
| ６限 | | | | | |

（2025 年度 3 年次 S セメスター時間割）

## M. S さん

ぼくがフランス科に進学したきっかけは５月に開催されたガイダンスでした。当初は超域の表象文化論コースや本郷の仏文・現代文芸論等への進学も視野に入れていたものの、自分の興味が本当に文学だけなのか、いまいち自信が持てませんでした。

そんな折、クラスの友人に誘われたフランス科のガイダンスに出席し、研究室のアットホームな雰囲気や蔵書、そして先輩方の知識量や見識に圧倒され、「ここならば自分の興味関心をゆっくり見つめられるのではないか」と思いフランス科への進学を考え始めました。

３年生になって本格的に科の講義を受けるようになり、課題の重さや前期過程とは比べものにならない語学レベルの高さに圧倒されるばかりです。中には大学院の修士・博士の先輩方に囲まれる機会もあり、日々刺激を受けています。元々フランス文学・映画に多少興味があった程度でしたが、研究室の蔵書や科の講義で文化の知識も習得でき喜ばしい限りです。

最初からここが第１志望ではなかった身ではありますが、このような最良の環境を用意してくれるフランス科をぼくは自信を持ってお勧めします。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| １限 | | | | | |
| ２限 | ヨーロッパ政治論 | 専門フランス語 | フランス歴史文化論 | 専門フランス語 | |
| ３限 | 専門フランス語 | フランス文学テクスト分析 | 表象文化論特殊研究演習 | フランス研究（フランス政治外交論） | 比較文学比較文化特殊研究 |
| ４限 | 芸術作品分析法 | | | | |
| ５限 | | | | | |
| ６限 | | | | | |

（2025 年度 3 年次 S セメスター時間割）

## M. M さん

前期課程の授業を受ける中で、学生が大教室に集まって先生がたのお話を聞く授業より、少人数で質問や議論をしながら進めていく授業の方が肌に合うように感じるようになり、そのことを踏まえてまずは進学先として後期教養を中心に考えるようになりました。専攻内容についてはとくに絞れませんでしたが、とくに政治や芸術の分野における西洋中心主義への批判的な反省という思考の枠組みは前期課程の授業の中でもやはり重要な視点として浮かび上がってくるように思え、そういった視座から勉強を続けて、自分が研究したいと思えるものを探そうと考えていました。

そうしたことを踏まえ、おもな志望は地域文化研究のほかには同学科の超域文化科学や、教養学部学際科学科 A 群の科学技術論コースに絞られていきました。最終的には前期課程の成績の都合や、進学選択の時期のちょっとした興味に影響されて地域文化研究を選択しました。

先述の通りフランスの地域研究そのものに関心があったわけではないため、地域文化研究のなかでのコース選択は、アジア科とフランス科で少し迷いました。最終的には「どこに行こうとだいたいやりたいことはできる」という先輩がたからの助言もあって、せっかくなら本格的にフランス語を勉強でき、また思想・人類学の先生がたも比較的多く集まっているフランス科に進学を決めました。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| １限 | | | | | |
| ２限 | フランス語学フランス文学演習(本郷) | 専門フランス語 | | フランス思想テクスト分析演習 | 専門フランス語 |
| ３限 | | 日本文学 | 共通フランス語(作文) | | 比較文学比較文化特殊研究Ⅰ |
| ４限 | フランス語学概論(本郷) | 専門フランス語 | | | |
| ５限 | | | 学際日本文化論演習Ⅴ | | |
| ６限 | | | | | |

（2025 年度 3 年次 S セメスター時間割）

## H. Y さん

私は、もともと紛争解決や国際協力の分野に興味があり、特にアフリカ地域における民族紛争や教育の分野での協力について学びたいと考えていました。初めは教育学部を考えていましたが、少人数での授業や、より直接的に国際関係や紛争について学べることを知って教養学部を目指すようになりました。

当初は、国際関係論コースを目指したいと思っていましたが、少し成績が足りなかったことと、サブメジャープログラムを知ったことで、教養学科の地域文化研究科を知りました。地域の中では、アジアコースとフランスコースを迷いましたが、雰囲気が好きだったのでフランスコースを選びました。国際関係論コースは、国際関係の中のいろんな分野を広く学べるので、今では、一つの文化圏に軸を置きながら、サブメジャーとして国際関係を広く学ぶことができてとても良かったと思っていて、後悔はしていません。

フランスコースでは、フランス語やフランスの思想、文学についての授業が多いですが、アフリカ地域についても学ぶことができています。例えば、下の専門フランス語（12）はアフリカ地域に関するフランス語文献を読むという授業です。卒論の執筆は少し不安ですが、楽しみです。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|---|---|---|---|---|
| １限 | | | | | |
| ２限 | | 共通フランス語（10）（会話） | | 専門フランス語（8） | |
| ３限 | 特殊講義「アフリカ国際関係」 | フランス文学テクスト分析 | 国際法 | フランス研究 III（フランス政治外交論） | |
| ４限 | 国際法 | 専門フランス語（12） | | | |
| ５限 | 国際法 | | | | |
| ６限 | | | | | |

（2025 年度 3 年次 S セメスター時間割）

# ７．卒論について

卒業論文は、後期課程で学んだことがらを学問的な形式で発表する、いわばフランス科での生活を集大成する機会です。その論文は、フランス語で執筆しなければなりません。「とってもカンタン♪」ということはなさそうですが、もちろんハードルに見合うだけのバックアップ体制があります。４年生の初夏から秋にかけ、研究テーマの報告、指導教員との面談、フランス語の添削などを経るうち、いつのまにかステップをのぼっていたということが実感されるでしょう。先輩方が「実はね……」とみずからの苦労話を交えながら相談に乗ってもくれるはずです。過去数年のテーマをご覧いただきましょう。

2024 年度

パンタグリュエルの人物像における非一貫性／フランスにおけるムスリム女性の衣服をめぐる議論／ベイリスムとモーリス・バレスの恋愛論／第一次世界大戦から和解期にかけてのフランスにおけるドイツ語／フランスにおける性教育／トランスジェンダーと痛み――現象学的見地から

2023 年度

服装とジェンダー規範／モーリス・パポン刑事裁判／日本とフランスにおける離婚後の共同親権

2022 年度

ミシェル・フーコーにおけるオイディプスの肖像と真理の問題系／ポール・リクールの『有限性と罪責性』における悪と自由

2020 年度

フランスにおける同性愛のメディア表象/フランスにおけるスポーツとナショナリズムの関係/子供一個人/フランスにおける映画助成/世界的な死刑廃止に向けてー法的事例としての日本とフランス

2019 年度

ジャン＝リュック・ナンシーと「認識論的切断」の脱構築/アダン・ド・ラ・アルにおける結婚、愛、女性

2018 年度

欧州建設に関するフランスの国民投票/表現の自由と『シャルリ・エブド』襲撃事件/ブレとピラネージ/移民の子どもの教育

2017 年度

レオン・ロッシュ/シドニー=ガブリエル・コレット/ストラスブールと「レユニオン」/ロラン・バルト/クリスチャン・ボルタンスキー/連帯の罪

2016 年度

カンタベリー物語/ジャック・ベッケル

火花散る思想の切っ先から文学の底知れぬ魅惑まで、政治・社会のアクチュアリティから豊かな層を成す歴史、そして胸躍る映画・舞台・ファッションまで、分野も時代もさまざまです。地域の拡がりでいえば、フランスはもちろんのこと、アフリカ、カリブ海地域を視野に収め、よくよく見れば「これはフランスなの？」といったテーマだって散らばっています。「地域」とは何か、「文化」とは何か、ハナから決めてかかるのでなく、むしろ枠組み自体を問い直してゆくことも、地域文化研究の大切な務めです。「それはダメ」と頭ごなしに禁じられるものは何もありません。「これは！」と感じた鉱脈を臆せず掘り進めば、いつか貴重な宝石の感触を指先に覚える瞬間が訪れるにちがいありません。そのための道具は、進学後の授業や独学の時間、あるいは研究室での何気ない会話をつうじてきっと揃えられるはずです。

加えて、ひとつの指針となるだろう本を挙げておきます。

**石井洋二郎・工藤庸子編『フランスとその〈外部〉』東京大学出版会、2004 年**

専任の先生方が中心となって、フランス地域文化研究の領野をわかりやすく示すために編んだ一冊です。ぜひ一度、お手に取ってみてください。

# ８．進路について

卒業後の進路についてはどうでしょうか。こじんまりした研究室ではありますので、大学院に進学する方が多く感じられる、というのはたしかです。けれども、以下の一例をご覧いただければ一目瞭然、就職先も多種多様です。

**就職**

IHI/アクサ/アクセンチュア/朝日新聞社/アビームコンサルティング/岩波書店/外務省/共同通信/警察庁/厚生省/国際交流基金/埼玉県庁/住友商事/住友生命/税理士法人トーマツ/総務省/高島屋/TBS/東京ガス/東京大学（職員）/東芝/東北電力/日産自動車/日本経済新聞社/日本通運株式会社/フジテレビ/フランス銀行/フリークアウト・ホールディングス/ベネッセ・コーポレーション/ポーラ/ミキハウス/三井住友アセットマネジメント/三菱電機/三菱 UFJ 銀行/未來社　など

**進学**

東京大学大学院総合文化研究科/同人文社会系研究科/同経済学研究科/同法学政治学研究科／同工学研究科/公共政策大学院　など

修士課程を経ての就職も現在ではごくあたりまえとなりつつあり、実際に多くの先輩方が修士号を得たのち、社会に旅立っています。また、大学院に学ぶ方のうち、社会での経験を携えていらした方も少なくありません。ひるがえって、いまはまだ「遠い話」かもしれませんが、海外への専門的な留学という選択肢がもちろんあります。学部と大学院の一体性は強く、「その先」を考えるなら、進路は上に記した以上に拡がっています。

もちろん、大学院の博士課程まで進み、その後研究者の道に進まれる方も多くいらっしゃいます。フランス研究コース出身の方が、以下のような大学に就職され、全国各地で活躍されています。

愛知県立芸術大学/青山学院大学/大阪大学/鹿児島大学/金沢大学/関西学院大学/関東学院大学/京都精華大学/慶應義塾大学/神戸女学院大学/滋賀大学/静岡文化芸術大学/筑波大学/東京外国語大学/東京大学/東京工業大学/同志社女子大学/獨協大学/白鷗大学/北海道大学/明治大学/明治学院大学/立教大学/早稲田大学　など

いずれの道に進むにしても、考えるのに十分なだけの時間は必ずありますし、ここでも先輩方のアドヴァイスがきっと役に立つことでしょう。

# ９．おわりに

さて、パンフレットはひとまずこれでおしまいです。

これではまだフランス科のことを十分に伝えられていないかもしれない、あるいはみなさんが知りたいことはもっと別のことかもしれない、といった忸怩たる思いもあります。さらなる情報については、たとえばフランス研究コースのホームページ（http://france.c.u-tokyo.ac.jp/）などをご覧いただければと思います。フランス科の関わる催しなどの情報も、随時更新されています。

とはいえやはり、生の声を聞いていただくことが最良の方法であるにはちがいありません。ガイダンスの機会はもちろんのこと、これからも気が向いた折々に（たとえばお昼休みに昼食をもって）ぜひご遠慮なく研究室へお立ち寄りをくだされればと思います。「こんなに真剣なのか！」ということはあまりなさそうで、ご飯を食べたりお茶を飲んだり、ちょっと昼寝をしたり、むしろ「こんなにリラックスしているのか！」と驚かれるかもしれませんが、研究室の素の姿を感じていただく縁にもなるはずです。

